

機関番号：13201  
研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2008～2010  
課題番号：20520465  
研究課題名（和文）外国籍年少者の為の学習環境デザイン：散在（非集住）地域型共生  
サポートの形を探る  
研究課題名（英文）Design for a Japanese Language Learning Environment for Foreign  
Children: A Support Model Targeting an Area Diffusely Populated with Foreign Residents  
研究代表者  
山崎 けい子（YAMAZAKI KEIKO）  
富山大学・人文学部・教授  
研究者番号：50313581

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、富山のような外国籍年少者が広い範囲に散在している地域の支援に着目している。子ども達の周辺に集う様々な人々を巻き込み、国籍や役割を超え、地理的にもばらばらに存在する支援の力を集め連携を結ぶ試みを行うこと、学習環境のデザインの可能性を探ることが本研究の目的である。そのため、翻訳教材作成プロジェクトを企画し、実際の活動における人々の関わり方を記録、分析、考察した。また、小学校国語教科書翻訳教材『どちらから勉強する？日本語？母語？』を2011年3月30日に発刊した。外国籍等の子どもの支援現場を孤立させないことが、ある程度までではあるが、なされてきていると考えている。

実践の中で得た成果を以下にまとめる。(1)散在（非集住）地域の不便さを克服するため、HPを拠り所としたバーチャルなコミュニティづくりを目指したが、非常に限定的な成果しか得られなかった。代替的に機能したのが、メンバーリストであった。(2)翻訳教材作成プロジェクトの中で、それぞれのメンバーが関わり、翻訳作業に価値を見だし、実際の現場にあわせるべく自分自身の立ち位置を変化させていくことが認められた。(3)自分の母語へ教材を翻訳することで、翻訳者が自身の母文化・母言語アイデンティティをとらえ直し、エンパワーメントの効果があることが観察された。(4)散在地域の外国籍年少者の日本語言語学習に関する支援モデルの試案をまとめた。

## 研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to investigate possibilities for language learning environment design for children of foreign nationalities in a region such as Toyama, where the population of foreign residents is diffused over a wide area. Involving the participation of a wide variety of people with the opportunity or inclination to work with foreign children, this study worked to promote collaborative efforts between people irrespective of their nationality or social/professional role, and to coordinate supportive measures that would otherwise be conducted separately in different areas. To further the goals of this study, a translation materials production project was initiated, and the ways in which project members interacted with each other in actual activities were recorded, analyzed, and

examined. In addition, *Which Language do you Study from? Japanese? Your Native Language?*, a selection of translated materials complementing an elementary school level Japanese language textbook, was published on March 30, 2011. We believe that this study succeeded, to some extent, in preventing isolation between the various elements of the community involved in supporting foreign children.

The results achieved by this study are as follows: (1) To overcome the inconveniences experienced in regions with a diffuse population of foreign students, a web site was created to act as the locus of a “virtual community”; however, only very limited results were seen. A mailing list functioned as an alternative measure. (2) In the translation materials production project, it was observed that all participating members were able to play a part in the project, which allowed them to find value in the process of translating, and also enabled them to make adjustments in their various stances to better suit their association with foreign students. (3) By translating materials into their native language, project members were able to rediscover their native cultural and linguistic identity, which led to an improved sense of empowerment. (4) A tentative model for Japanese language learning support for foreign children in regions with diffuse foreign resident populations was drafted.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：外国籍年少者、日本語教育、学習環境、翻訳教材、共生サポート、支援ネットワーク

#### 1. 研究開始当初の背景

平成18年度の富山県外国人児童数は272人（内日本語指導が必要な児童は224人）、富山県外国人中学生数は83人（内日本語指導が必要な生徒は52人）となっており、年々増加傾向にあった。しかし、大規模集住地域があるわけではなく、小規模な塊はあるもの

の広い範囲に散在して住んでいる。全国的にもこのような状況の地方都市は少なくない。集住地域に対する用語として、富山のような場合を「散在地域」と呼び出したのは研究開始の頃であった。早期から注目され既に支援の取り組みが進んでいる大規模集住地域とは異なり、散在地域の支援をどのような形で

充実させて行くかが大きな課題であった。

## 2. 研究の目的

本研究では、外国籍等の子どもの周辺に集う人々（学校関係者・外国籍等の子どもの保護者・地域の外国語母語話者・日本人ボランティア・留学生・日本語教師等々）を巻き込み、国籍や役割を超え、地理的にも散在する支援の力を集め連携を結ぶという、大きなくくりでの言語学習環境をデザインした。支援する人も支援される人も役割の区別を超えて共生し支え合うための活動を計画、実践し、その可能性を模索することが本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

具体的には、「子供ラーニングサポート北陸」という支援者の集まりの中で、「翻訳教材作成プロジェクト」を計画、実施した。

本研究では、翻訳教材を使用した言語学習の過程に加え、「翻訳教材そのものを作成していく過程」にも力点を置いている。外国籍等の子どもを囲む地域のさまざまなメンバーが、助け合い・協力（時には衝突）をしながら、翻訳教材作成に取り組む。またその教材を使って学習支援を行う。その助け合い・連携の中にこそ実質的な共生サポート関係が生まれ、学習環境となり得るのではないかと考えた。

本研究では、学習を頭の中で起こっている個人の認知の観点からはとらえていない。人は、相互行為、つまり関係性の中で学ぶと考えている。翻訳教材は、複数の共同体のメンバーが集うことで作成される「人工物」である。さらに、その同じ作成された「人工物」を複数の共同体の人々、子どもたちが使用することで、それぞれの共同体がつながり、新たな関係が築かれていくと考えている。

翻訳教材作成プロジェクトを企画し、実際の活動における人々の関わり方を、以下の4つの観点から分析、考察した。

- (1) 散在（非集住）地域の不便さを克服するための、HPを拠り所としたバーチャルなコミュニティづくりがどこまで可能であるか。
- (2) 翻訳教材がどのように作成され、使用されるのか。翻訳教材作成プロジェクトはどのような役割を果たせるか。
- (3) 本プロジェクト創出に伴い、関係した翻訳者の意識はどのように変容するのか。
- (4) 「散在住地域型・共生・サポート」の一つのモデルとして、外国籍年少者の為の学習環境をデザインできるか。

## 4. 研究成果

本活動及び研究は「富山県における外国籍年初者の学習環境創出のための調査研究」（平成19年度 富山第一銀行奨学財団 助成研究 研究代表者：深澤のぞみ 共同研究者：山崎けい子、湯川純幸、中河和子、田上栄子）に端を発し、その後3年間は科学研究費による本研究に発展し、合計4年間の実績を積むことができた。

この4年間で、小学校国語教材4作品の翻訳、日本語・母語学習用ワークシートの作成などを、たくさんの協力者の力を集めることで実現してきた。教材は、子供ラーニングサポート北陸HP (<http://kodomo-mirai.sakura.ne.jp/>) で公開してきた（2011年3月まで）が、本研究の最後のまとめとして、小学校国語教科書翻訳教材『どっちから勉強する？日本語？母語？』を2011年3月30日に発刊した（内容は以下の通りである。「白いぼうし」「一つの花」「ごんぎつね」「アップとルーズで伝える」5カ国語翻訳、粗筋理解のためのイラスト、母語学習用ワークシート、日本語学習用ワークシート）。

一連の活動の分析、考察をまとめ、『研究成果報告書』を2011年3月30日に発刊した（内容は以下の通りである。外国籍年少者のための学習デザインの試み・支援の形への提言・翻訳教材とワークシート・地域の人々の変容）。その中の内容を研究の方法に記した(1)から(4)に即してまとめる。

- (1) 散在（非集住）地域の不便さを克服するための、HPを拠り所としたバーチャルなコミュニティづくりを目指したが、非常に限定的な成果しか見られなかった。HPは教材をダウンロードする場所としては、一定数のアクセス記録があり機能した。しかしながら、HPにリンクされた掲示板は活発に使用されることがなかった。代替として効果的に機能したものは、メーリングリスト（ML）であった。MLは散在地域の心強い連絡や連携の手段となり得る。
- (2) 富山という散在地域で、翻訳教材（媒介する人工物）が地域のメンバーにより作成された。それぞれのメンバーとの関わりの中で、翻訳作業に価値を見だし、自分自身の立ち位置も変化させていったことが認められた。そのせめぎ合いの中で、多様な現場に対応させるようと、最大公約数的性質のワークシート教材を開発もしている。そして外国籍等の子どもへの支援現場など、必要とされる様々な場を行き交い始めた。このように支援現場を孤立させないことが、ある程度までではあるが、なされてきている。この散在地域の支援をまとめていく上で、このプロジェクトがひとつのシンボリックな役割を果たし始めているということも出来ると考えている。
- (3) 国際結婚による配偶者（非日本人）の場合を例に挙げ、自分の母語に対する意識

を変化させていることを確認した。翻訳者が自分の母語へ教材を翻訳することで、自身の母文化・母言語アイデンティティをとらえ直している。日本社会・家庭内のマイノリティの文化ではなく、新たな価値付けをされた文化として意識されており、エンパワーメントの効果があることを考察した。

- (4) 実践から得た、散在地域の外国籍年少者の日本語言語学習に関する支援モデルの試案を1)～6)にまとめた。
  - 1) 散在地域での支援のリソースを集める契機とする、**異種多数のメンバーが参加出来る、多方面利益型**（皆が価値を見いだすことの出来る）、かつ、**産出型の活動**を核としてつくる。
  - 2) **外国籍年少者学習関連の産出物**を作成することで、活動の特徴が明らかになり、それによって関心のあるメンバーが集まる。
  - 3) **産出物（具体物）は多数複製して配布**することが出来、それを手にする人と関係をつけ、つながりを広める。
  - 4) つながりの深化のため、**つながりの循環性**を確保する。（使用者の意見を反映させる、産出物の再生産などを行なうなどが考えられる。）
  - 5) つながりを継続、拡大、深化させるために、イベント等の**実際に会う機会**を設ける。（「顔の見える関係」の採用）
- (5) 遠隔地の不便を解消させるために、**意見交換出来る手段**（メーリングリスト等）を持つ。

最後に、本研究はその性格上、たくさんの方々の協力を得なければ実施出来ないものであった。ここで一々名前をお挙げすることが

できないが、この活動を支えてくださったすべての方々に、心からの感謝を申し上げたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 山崎けい子・中河和子・田上栄子 (2011)

「外国籍年少者のための日本語学習環境デザイン(2)-散在地域支援モデルの試案-」『富山大学人文学部紀要』第54号 pp.27-40

② 山崎けい子・深澤のぞみ・中河和子・

田上栄子 (2009) 「外国籍年少者のための日本語学習環境デザイン—散在地域の学習を支えるために—」『富山大学人文学部紀要』第51号 pp.1-15

③ 深澤のぞみ・山崎けい子・中河和子・

田上栄子 (2009) 「外国人散在(非集住)地域における外国籍年少者支援ネットワークに関する考察」『インターカルチュラル』第7号(日本国際文化学会) pp.135-146 査読有

[学会発表] (計2件)

(口頭発表: 国際会議)

① 山崎けい子・中河和子・田上栄子 「言語学習環境をデザインする: 日本在住(散在地域)外国籍年少者支援の形」2010世界日本語教育大会 論文集 予稿集 (2010.8.1 台湾 国立政治大學)

(口頭発表: ポスター発表)

② 田上栄子・中河和子・山崎けい子・深澤のぞみ 「外国籍年少者支援のための翻訳教材に伴うワークシートの作成」『2009年度日本語教育学会 研究集会第四回 北陸地区富山』社団法人日本語教育学会北陸地区研究集会 (2009.6.20 とやま市民交流館(CiC))

[その他]

ホームページ

子供ラーニングサポート北陸 HP  
(<http://kodomo-mirai.sakura.ne.jp/>)

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 けい子 (YAMAZAKI KEIKO)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号: 50313581

(2) 研究分担者

中河 和子 (NAKAGAWA KAZUKO)

富山大学・医学薬学研究部(医学)・非常

勤講師

研究者番号: 00456401

深澤 のぞみ (FUKASAWA NOZOMI)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号: 60313590

(2008年~2009年)

(3) 研究協力者

田上 栄子 (TAGAMI EIKO)

トヤマヤポニカ・日本語講師